報告者	タイトル	発表内容
東栄一郎	開拓農業を通じた北米と満州のつながり:カリフォルニア日本人移民の逆移動と彼らの専門知識の移入過程について	本発表では、1920年代以降、近代的大農の「専門家」としてカリフォルニアから満州に渡り、満鉄や満拓などのテクノクラットや嘱託として働い た(元)北米移民の活動について考察する。日本の満州研究は、加藤完治、那須浩、石黒忠篤などが唱えた、国粋的農本主義に基づいた小農家族単位の 「開拓」や、いわゆる「北海道農法」の導入経過とその効果などを中心課題としている場合が多いが、開拓農業と北米移民体験との関連性についての考 察は、ほとんどなされていない。本発表は、いかに北米式の開拓農業、特に大規模「機械農業」が満州開拓事業の一つの重要な潮流をつくっていたか、 そしてそれを元北米移民がいかに支えていたかを主題とする。日本の満州専門家が日本史の範疇で、東アジアにおける帝国領土の枠組みでしか人的な動 きや物資的・思想的な動きを見ていないことが、満州開拓と北米移民とのつながりと満州開拓農業の国際的な側面を見逃す結果を生み出していた問題を 指摘し、それをおぎなう「環太平洋の移動」という視点の重要性を考えてみたい。
蘭信三	帝国の狭間を生きる－在満台湾人と在満沖縄出身者を手がかりに	本報告では、日本帝国期に台湾から満洲に留学して活躍した在満台湾人研究を参照し、在満沖縄出身者とその後中国に残留した女性を事例として「帝国の狭間を生きる」ことの意味を考察します。植民地期の台湾人にとって台湾社会には「ガラスの天井」があり、皮肉にも進学も内地でのほうが有利であり、満洲はもっと有利であったと言われます。何故なら、在満台湾人にとっても満洲は新開地としてチャンスの地だったし、満洲国にとっては日本語と中国語の双方が出来る台湾籍民は日中の媒介者として、かつ五族協和のアリバイ的存在だったからです。他方、沖縄はデカセギが慣行化した社会であり、沖縄出身者はチャンスを求めて内地、外地とデカセギに重ねていました。満洲国建国の頃は満洲ブームもあり、そのデカセギ先のひとつだったのです。ここでは、内地デカセギを繰り返しつつも助産師資格を取り、にもかかわらず満洲国に移住し、戦後は中国に残留した一人の女性のライフヒストリーを事例として、帝国の周辺出身者が帝国、満洲国で生きること、さらには戦後の新中国で生きることを、いわば「帝国の狭間に生きる」というフレームから考察します。
厳平	帝国大学・高等学校における中国人留学生:第一高等学校特設高等科の実態を中心に	帝国日本の満州支配や日中戦争に伴ない、帝国大学における中国人留学生の受け入れ体制がどのように変わってきたのか。本報告では、予科留学生を対象に、その出身地の変化を確認しながら、留学生の入学情況、とりわけ卒業生の進学問題をめぐる外務省、帝国大学及び各学部の対応の違いを明らかにすることを目指す。
Martin Dusinberre	「移民」と「植民」の狭間における明治時代の日本人労働者:「帝国国家」の再定義	本発表では、アジア太平洋地域へ渡航した日本人労働者のローカルヒストリーを通じて、明治以降の帝国主義の特徴を再検討する。東先生をはじめ最近の研究者が指摘している通り、これまでのアジア史と太平洋史は、分野的あるいは知識的に別々に考察されてきた。つまり、日本海を渡った日本人労働者は「植民史」、太平洋を渡った労働者は「移民史」という大きな枠組みの中に位置づけられてきた。本発表では、このアジア・太平洋の境界を実際に超えた人と物(特に船舶)の歴史を取り上げることによって日本帝国主義の特徴、またローカルヒストリーとグローバルヒストリーの境界を考察していく。
佐原彩子	ベトナム・ロビーの人道主義:合衆国の対アジア政策と慈善活動の境界	南ベトナムのゴ・ジン・ジェム政権を支持した団体「ベトナムの友たるアメリカ人(American Friends of Vietnam)」通称「ベトナム・ロビー」に難民救済団体「国際救援委員会(International Rescue Committee)」のメンバーの多くが関わっていた。このメンバーたちの数人が日本占領にも関わったことに注目しつつ、彼らの人道主義と合衆国の対アジア政策との関係を分析する。

佐藤けあき	日系アメリカ人二世の日本進駐経験—ハワイにおける元語学兵への聞き取り調査から	本報告では、第二次世界大戦に巻き込まれた日系アメリカ人がどのような経験をし、その経験がどのように記憶されてきたかを概観する。その中でハワイ社会における日系人と従軍経験、終戦直後米軍として日本に進駐した二世語学兵の経験がいかに位置づけられるかを考察する。元語学兵への日本進駐に関する聞き取り調査から、日本人と対峙した彼らが自らのエスニック・バックグラウンドや日本・アメリカをどのようにとらえているかを明らかにする。
飯島真里子	「帝国間ネットワーク」の考察—戦前期のハワイ・台湾におけるコーヒー栽培を事例として	日本統治下における台湾コーヒー栽培の経緯について、ハワイとの関係性に注目しながら考察する。これまで、異なる帝国の植民地同士の連関性についてはあまり考察が進んでいなかったが、コーヒー栽培を介したハワイ—台湾間の移動（ヒト・モノ・商業活動）を明らかにすることで、帝国間ネットワークが日本人ディアスポラによって支えられたことを論じる。